

ウーマン スマイル カンパニー

senshukai

株式会社 千趣会

# 千趣会が取り組むクラウドファースト



# 本日のアジェンダ

1. 会社概要
2. これまで取り組み
3. 今後の展望

# 自己紹介

情報システム部 システム管理チーム  
池本 修幸 (いけもと のぶゆき)

## ■ 担当範囲

『社内インフラの何でも屋』

サーバ、ネットワーク（データ・音声）、セキュリティ・・・などなど。

## ■ 最近の仕事

新規物流倉庫（美濃加茂）の立ち上げ、インフラ設計構築。  
12月稼働に向けて集中対応。

## ■ 趣味

趣味は仕事です！ではなく、お酒を飲むこと。

特にクラフトビールを好んで飲み、クラフトビールの普及の為に

「Beerfes®」へのボランティア参加なども。



# 本日のアジェンダ

1. 会社概要
2. これまで取り組み
3. 今後の展望

# 会社概要(2015年6月30日現在)

社名 株式会社 千趣会

本社 大阪市北区同心1-8-9

東京本社 東京都品川区北品川5-9-11大崎MTビル12・13F

代表者 代表取締役社長 田邊 道夫

設立年月日 1955年11月9日

資本金 22,304百万円

上場証券取引所 東証一部 (コード: 8165)

従業員数 (連結) 2,022名

単元株式数 100株

株主数 27,983名



就任5年目



本社  
大阪本社







ビジネスセンター  
ビジネスセンター



東京本社  
東京本社

# 沿革

「女性を幸せにする会社」「女性に笑顔を届ける会社」。これが、千趣会のビジョンでありテーマです。創業から60年たった今も、一貫して女性に喜ばれる商品・サービスを開発し提供し続けています。

1954年	千趣会の前身「味楽会」発足 こけし頒布会開始 ※このこけしを「こけし千体趣味蒐集の会」から仕入れることになり、 会の名称もその"千"と"趣"の文字から『千趣会』となりました。	
1955年	株式会社千趣会 設立	
1958年	料理カード付き雑誌「たべもの千趣」創刊（のちにクックに改称）	
1976年	カタログ「ベルメゾン」を創刊	
1984年	大阪証券取引所第二部上場	
1988年	東京証券取引所第二部上場	
1990年	東京・大阪証券取引所第一部上場	
2000年	オンラインショッピングサイト「ベルメゾンネット」オープン	
2007年	暮らす服ショップ一号店オープン	
2008年	株式会社ディアーズ・ブレイン子会社化	
2013年	株式会社千趣会チャイルドケア設立	
2015年	創業60周年	

ウーマン スマイル カンパニー

# senshukai

笑顔が積み重なって、  
しあわせは生まれる。  
ひとりひとりが笑顔になれば、  
明日はもっと素敵になる。

私たちは、女性の毎日に  
笑顔が届けることを通じて、  
世の中をしあわせにしていく会社です。



# 事業紹介

## その他事業 5億円



保育園運営事業

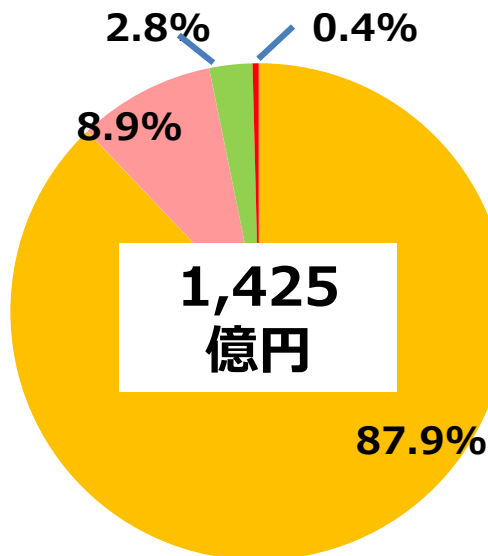


クレジットカード

## 法人事業 39億円



## 2014年度売上高



1,425  
億円

## ブライダル事業 128億円



## 通販事業 1,253億円

## カタログ事業



## 頒布会事業



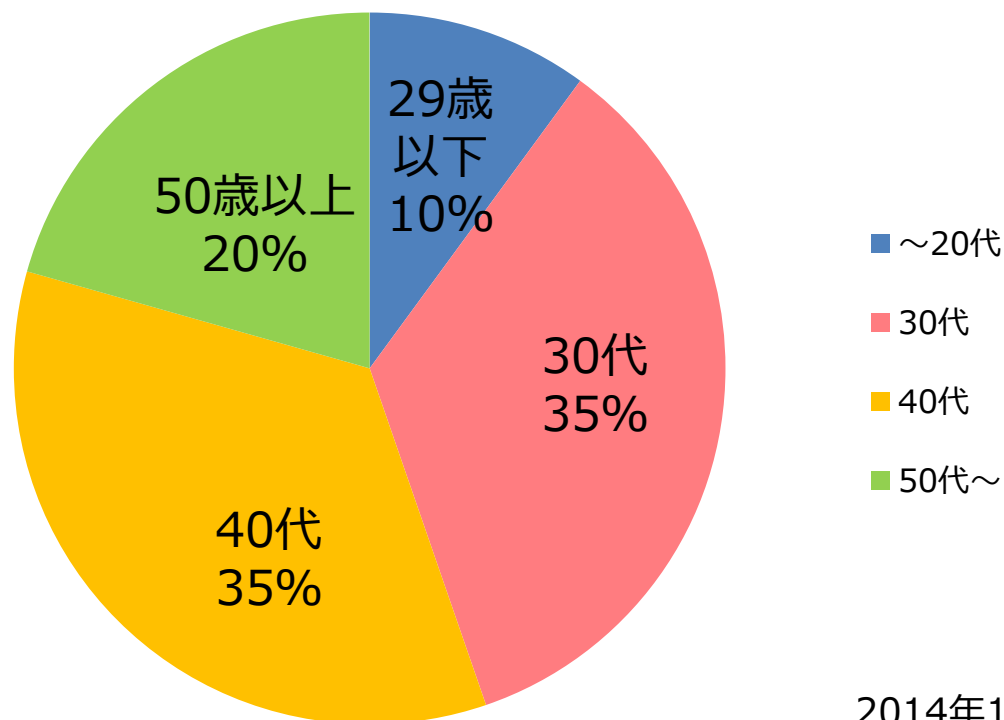


## ◆ 1年以内購入者の年代分布（女性）

女性の購入者の割合が92%です。

また年齢分布でも30代~40代が70%を占めています。

仕事・結婚・出産・育児などライフステージに応じたの商品提案を行っています。



2014年12月末現在の  
1年以内購入者年齢分布  
(年齢不明分除く)

# 本日のアジェンダ

1. 会社概要
- 2. これまで取り組み**
3. 今後の展望

# AWSとの出会い

## ❖ 出会いは2012年

千趣会とAWSの出会いは2012年。

以前よりプライベートクラウドの活用やGoogleAppsの利用を行っていたためクラウドサービス活用のハードルはそれほど高くはありませんでした。

## ❖ 当初の不安

AWSが単なるIaaSではなくPaaSの要素もある為、サービスの種類が豊富です。

本当に使い切れるのか、使った結果どれくらいの費用が発生するのか？

サポートはどういった対応をしてくれるのか？

などなど、実担当者としては不安だらけでした。

## ❖ 決断のきっかけはAWS主催イベント

東京で開催されたAWS Summitへ訪問。

他社事例などから刺激を受けて「おためし」で導入を決定。

# AWS活用への試行錯誤①

## ❖ まずは無料枠の活用

何ができるのかを知る為には使ってみる事から。という事で、イメージしやすいEC2、S3を中心にアカウント無料枠で使ってみる。そのうちに他にも試してみたくなってEMRを使ったHadoopにもトライしました。

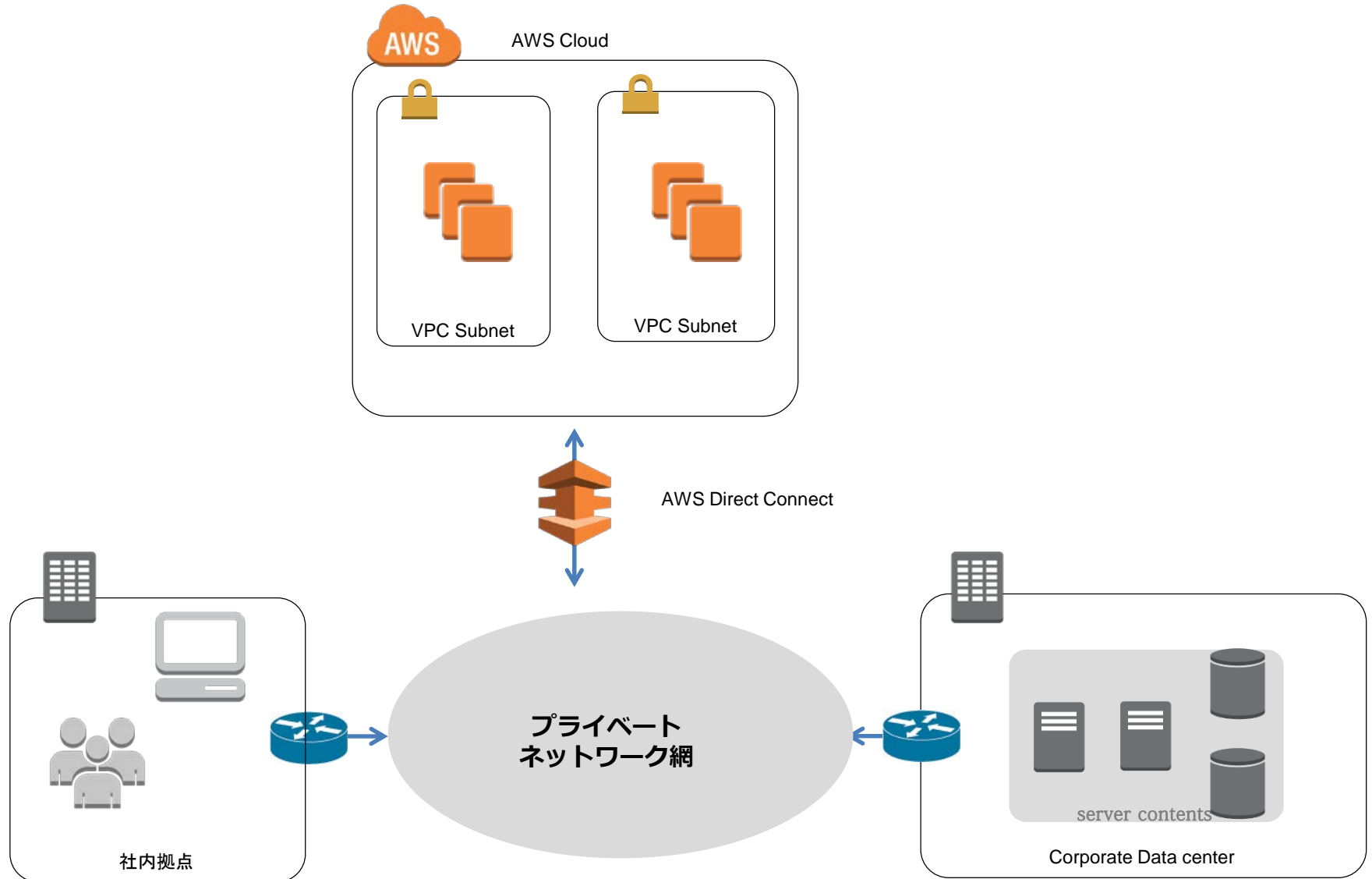
## ❖ DirectConnect（専用線接続）でプライベート環境を

AWSを使ってみると当初懸念していた費用の事やサポート面についての不安が無くなり、本格的に社内展開する為にもDirectConnect（専用線接続）を使った接続を行いプライベートアドレスを割り当てて使う方針に。

DirectConnectは、既に社内でも利用しているWAN回線との親和性とコストを考えてWANに直取できるサービスを採用を選択しました。

簡単な構成図は次ページにてご説明します。

# AWS接続図 Step①



## AWS活用への試行錯誤②

### ◆ クラウドファーストへ

DirectConnectによる接続環境が出来たことで、AWSのリソース活用の幅が広がりました。レスポンスも悪くなく体感的には基幹システムがあるDCと同等。

OS保守切れ対応の為に新たな基盤を必要としていたタイミングでもあり基本方針として社内システムの移行先はEC2を中心にクラウドありきで考えるようになりました。

※どうしても止められない仕組みやレガシーな接続を求められるものは引き続きオンプレミス

システム構築の際には  
まずクラウドでの構築を考える



物理的な制約があるなどの場合は  
オンプレミスを選択。



## AWS活用への試行錯誤②

### ◆ 社内説得の為の材料

システム担当としてはAWSの利便性を実感しましたが、周囲からの理解を得るためにはコストの問題は避けて通れないので見積もり用のフォーマットを作成。

これまでSIerに支払っていたサーバ構築費用などが大幅にダウンし、。  
ハードウェアの初期コストは「0」で、使った分だけ課金できるメリットを提示できる資料を作成。

費用面での貢献も大きい事が説明できれば社内での納得も得ることに成功しました。

# AWS展開の苦勞

## ❖ Windows2003サーバの移行

社内合意を得やすい環境を準備して本格的にAWS環境を推進。  
Windows2003サーバの移行や新規案件の構築はEC2を選定するもOSより上位のアプリケーションベンダーからはAWSの実績が少ないからかEC2で稼働させることを伝えると難色を示されるケースもありました。

(参考) 稼働実績パッケージの一部

▼OracleEssbase、WebSphere、AsteriaWarp、JP1、HITLOMANS、COMPANY

## ❖ ActiveDirectoryの移行

社内システムの認証基盤はActiveDirectoryが担っているので、OS保守切れに伴うEC2への移行の際には片側オンプレミスの構成も検討したが、またハードウェアの問題を意識したくなかったので冗長構成のままEC2へ移行。

クライアント側からすれば同一ホスト名で稼働させればEC2でも基本問題なしでしたがDNSの役割も担っていたのでIPアドレスが変わってしまう点については力技で対応が必要で、旧サーバの停止には少し時間を要してしまいました。



# AWS展開の苦勞

## ◆ 基幹システムとの大量データ連携

メインフレームで稼働している基幹システムとの連携を行う場合、これまで同一DC内で閉じていたトラフィックが外に出ってしまう事で発生するボトルネックを懸念。  
※EC2に関する性能不足は懸念しなかった

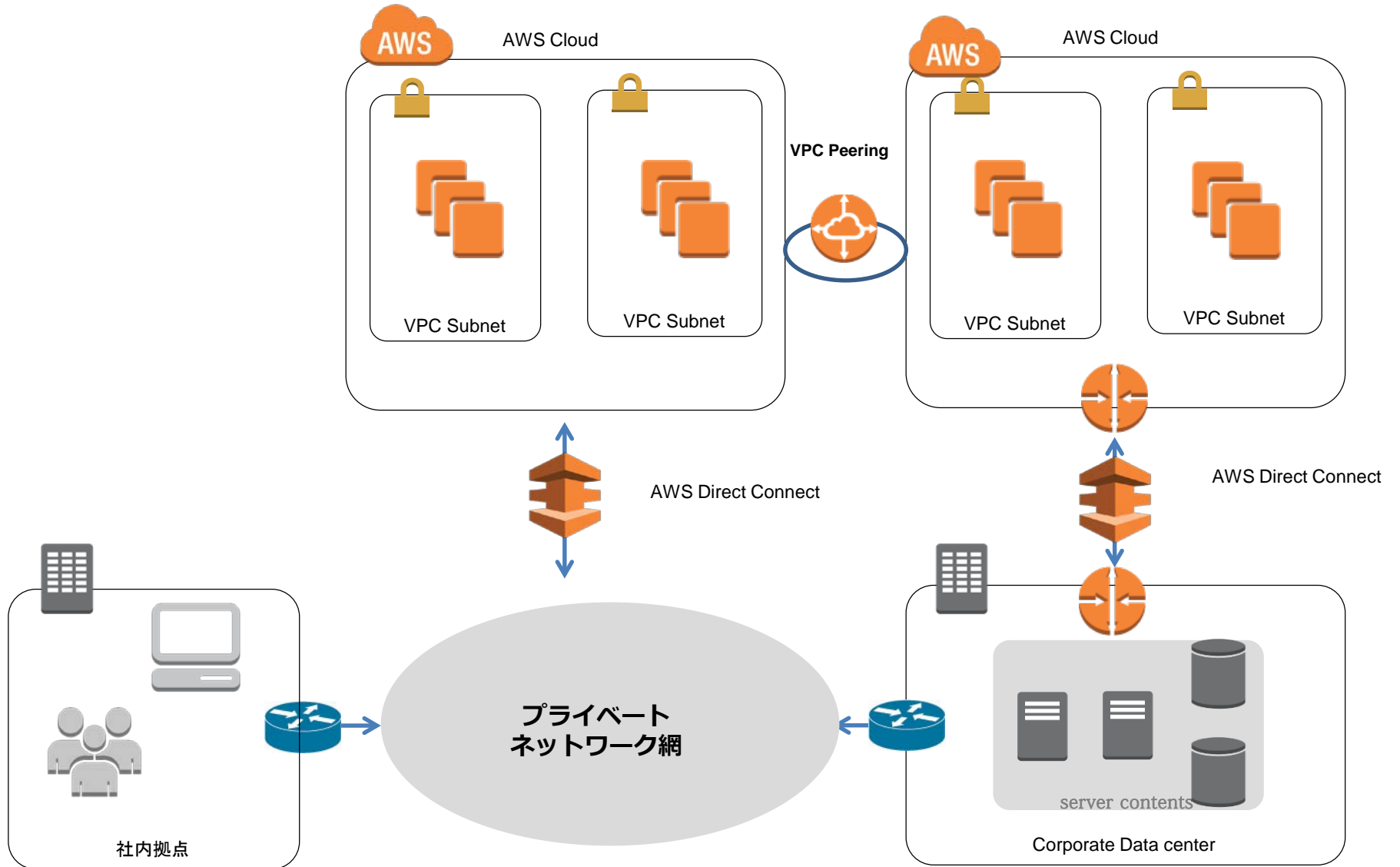
経営管理用の仕組みや今後進めたい基幹システム連携などでは特に大きなデータをやり取りする事から通信ネックにならない仕組みが必要となりました。

## ◆ 基幹システムとのDirectConnect

IBM社のDCで稼働している基幹システムとAWSの連携を意識して、WAN直収のDirectConnectとは別で、DCと直結するDirectConnectを構築。

従来から利用していたVPCと新たに構築するVPCとは「VPCピアリング」を使って接続。VPC間のトラフィックはAWSに面倒を見てもらう事で、意識することなく連携が出来るように。

# AWS接続図 Step②



# 本日のアジェンダ

1. 会社概要
2. これまで取り組み
- 3. 今後の展望**

# AWSを使った今後の取り組み

## ◆ メインフレーム処理の移行

2種類のDirectconnect接続環境を構築したことで、基幹システムとの連携についてネットワーク面での不安は無くなりました。

今後はメインフレームで稼働している処理をAWSへ移行しコスト削減を計画。

当面はMIPS処理の高いものから移行を進める事でコスト削減を実施。

メインフレームの  
MIPS値コスト

>

AWSの  
サービスコスト

コスト削減幅は2014年比で約20%を予定。

# AWSを使った今後の取り組み

## ◆ 標準化と自動化

これまでお話した内容はAWSをサーバ基盤として活用する事例が主でした。

今後はその活用の幅を広げて「標準化」した環境を「自動化」して展開する事を検討・計画しています。

### <目指す方向性>

- ・標準的なサーバ構築の自動化
- ・アプリケーションの自動デプロイ
- ・システムリリースの自動化と拡張性の確保

### <目的とする効果>

- ・運用自動化と管理工数削減
- ・アプリケーション公開のスピードアップ
- ・システムコストの最適化

## ◆ AWSを一定期間使ってみて分かった事

本格的に使い始めた2013年から現在、分かった事をまとめます。

- ・AWSサポートの対応が手厚い。コストはかかるが有償サポートはメリットが大きい。
- ・支払いに関しては明朗会計。ダッシュボードで公開されている。
- ・コスト削減の仕組み（リザーブドインスタンス）も用意されており、工夫は出来る。
- ・設計のスピードが上がった。キャパプラはざっくり。後でどうにでもなる。

## ◆ IT部門内での変化

AWSを積極的に使う事で部門内のメンバーにも変化が見られるようになりました。

- ・検証環境の調達が容易になり対応が効率化
- ・使った分だけ課金される事が浸透する事でインフラコスト意識が再認識

## ❖ AWSに期待する事

当初の出会いから約3年が経過し、その間もAWSはサービスとして進化していますが更にお願したい事としては「サービスとして提供されるシステムの増加」です。

EC2を使う事でハードウェアに関する悩みは無くなりました。

それでもシステム運用にはまだOSのバージョンや関連ミドルウェアの組み合わせに悩まされます。OSに依存しない（RDSなど）サービスが増える事でより悩み事が減る事になるので

## ❖ AWSをまだ使った事の無い方々へ

AWSは多種多様なサービスを提供している為、色々な可能性もありますがまだ利用した事の無い方へ弊社からのアドバイスとしては下記3点となります。

- ①パブリッククラウドをプライベート空間として活用できる
- ②無料枠と活用したスモールスタートでとにかく始めてみる
- ③新サービスのリリースやアップデートが早いので、  
最寄のAWS担当者から定期的に必要な情報を得るようにAWSの人と仲良くする

ウーマン スマイル カンパニー

senshukai

ご清聴ありがとうございました。